

受検番号

氏名

注意

一 問題は、表と裏にあります。
二 答えは、すべて解答欄に記入しなさい。

表 合 計

一 次の文章を読んで、1～7の問いに答えなさい。

合 計

二次の文章を読んで、1～5の問いに答えなさい。

三次の文章を読んで、1～5の問いに答えなさい。

弥生も末の七日、あけぼのの空朧々として、月は有明けにて光をさまれるものから、富士の峰かすかに見えて、上野・谷中の花の梢、またいつかはと心細し。むつまじき限りは宵よりつどひて、舟に乗りて送る。千住といふ所にて舟を上がれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻の巷に離別の涙をそそぐ。

I 行く春や鳥啼き魚の目は涙

これを矢立ての初めとして、行く道なほ進まず。人々は途中に立ち並びて、後ろ影の見ゆるまではと、見送るなるべし。

(松尾芭蕉『おくのほそ道』による)

【注】

*上野・谷中……今の東京都台東区の地名。桜の名所

*千住……今の東京都足立区の地名。奥州日光街道の最初の宿場

*幻の巷……幻のようにはかない現世

*矢立ての初め……旅先で詠む最初の句

1 つどひて を現代仮名遣いに直し、すべて平仮名で書きなさい。

--

2 あけぼのの空朧々として、富士の峰かすかに見えてとあるが、この情景を説明したものととして最も適するものを、次のア～エから一つ選んで記号を書きなさい。

ア まだ辺りは暗く、ただ月だけが輝いている

イ 月の光で遠くの山まで明るく照らされている

ウ 月の光が薄らいでいく中、遠くの山が見える

エ すっかり明るくなり遠くの山まで見渡せる

--

3 芭蕉がこれから先の長旅を強調して表した語句を、本文中から五字で抜き書きしなさい。

--

4 人々が芭蕉を見送る様子を次のようにまとめた。「a」「b」には当てはまる語を本文中から抜き書きしなさい。また、「c」には適する語句を書きなさい。

前日の「a」から集まり、翌三月二十七日、芭蕉とともに「b」で千住に行き、芭蕉の姿が「c」まで見送った。

a			
	b		
		c	

5 本文中のIの句と、芭蕉が平泉を訪れたときに詠んだIIの句を読み比べ、次のようにまとめた。「a」～「e」に適する語句を書きなさい。

II 夏草や兵どもが夢の跡

どちらの句も最初に「a」を表し、実際の情景に対するしみじみとした思いを「や」という「b」で表している。

IIは、青々と茂る夏草と夢のようにはかなく消えた兵どもが「c」の関係になっているのに対し、Iは、「d」までもが「行く春」を惜しむかのようなイメージを、親しい人々との「e」に重ねている。

e	c	a
	d	b